

テーマ別シンポジウム | 学校保健体育研究部会：【課題B】保健体育授業をいかに良質なものにするか**■ 2023年8月31日(木) 10:10～12:10 | 会場 RY203 良心館2階 R Y 2 0 3 番教室****学校保健体育研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／より良質な保健体育授業の具体像を考える その3—子どもたちの「豊かなスポーツライフ」の実現に向けて、教師が身に付けるべき資質・能力とは—**

コーディネーター：澤江 幸則（筑波大学）、原 祐一（岡山大学）

子どもたちの豊かなスポーツライフを支えるために求められる良質な保健体育授業とは何かを検討してきた過去2回のシンポジウムを踏まえて、今回は、それを実現へと導く教師が身に付けるべき資質・能力について議論することにした。

具体的には、既存のスポーツや知識を伝えるだけではなく、さまざまな社会情勢に応じて対応できる力、つまり運動やスポーツ、健康な生活を「創る」力や、いろいろな人の力と協調する「つながる」力が求められるという前提のもと、ご自身の教師経験と若手育成の実務経験から中村氏（京都市立下京中学校）、教員養成課程に関わる三田部氏（筑波大学）から、教員をめざす学生の課題を踏まえ、特に運動やスポーツを「創る」力を育成するうえでの取り組みについて、学校体育現場への豊富な助言経験をもつ宮口氏（石川県立大学）から、スポーツ科学という学際的な知見や人材が体育授業とどう「つながる」ことができるかについて話題提供していただくことにした。

これらの話題をもとに、子どもたちの豊かなスポーツライフを支える教師の資質とは何かを、教師教育という観点から議論してみたい。

[学校保健体育-SB-1] 学校内外をつなげる取り組みの現状と教師に期待することから*中村 利之¹ (1. 京都市立下京中学校)**[学校保健体育-SB-2] スポーツを創る力を育てられる教師***三田部 勇¹ (1. 筑波大学)**[学校保健体育-SB-3] 現代における魅力的な体育授業とは
オルタナティブな授業の提案***宮口 和義¹ (1. 石川県立大学)

テーマ別シンポジウム | 学校保健体育研究部会 | 【課題B】保健体育授業をいかに良質なものにするか

学校保健体育研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／より良質な保健体育授業の具体像を考える その3—子どもたちの「豊かなスポーツライフ」の実現に向けて、教師が身に付けるべき資質・能力とは—

コーディネーター：澤江 幸則（筑波大学）、原 祐一（岡山大学）

2023年8月31日(木) 10:10～12:10 RY203 (良心館2階 R Y 2 0 3 番教室)

子どもたちの豊かなスポーツライフを支えるために求められる良質な保健体育授業とは何かを検討してきた過去2回のシンポジウムを踏まえて、今回は、それを実現へと導く教師が身に付けるべき資質・能力について議論することにした。

具体的には、既存のスポーツや知識を伝えるだけではなく、さまざまな社会情勢に応じて対応できる力、つまり運動やスポーツ、健康な生活を「創る」力や、いろいろな人の力と協調する「つながる」力が求められるという前提のもと、ご自身の教師経験と若手育成の実務経験から中村氏（京都市立下京中学校）、教員養成課程に関わる三田部氏（筑波大学）から、教員をめざす学生の課題を踏まえ、特に運動やスポーツを「創る」力を育成するうえでの取り組みについて、学校体育現場への豊富な助言経験をもつ宮口氏（石川県立大学）から、スポーツ科学という学際的な知見や人材が体育授業とどう「つながる」ことができるかについて話題提供していただくことにした。

これらの話題をもとに、子どもたちの豊かなスポーツライフを支える教師の資質とは何かを、教師教育という観点から議論してみたい。

[学校保健体育-SB-1]学校内外をつなげる取り組みの現状と教師に期待することから

*中村 利之¹ (1. 京都市立下京中学校)

<演者略歴>

京都市立中学校保健体育科教員。2013年より京都府・京都市中学校体育連盟常任理事。2022年より京都府・京都市中学校体育連盟柔道専門部委員長。

学校体育・保健体育では、子どもたちの豊かなスポーツライフに向けた取り組みを進めることが求められているが、子どもたちに伝えるべき、子どもたちが身につけるべきものとして、何が必要なのだろうか。これからの学校体育・保健体育のあり方についていくつかの事例を交えて考えたことについて述べる。特に、現在の学校現場では、ミドルリーダー世代の教員の不足といった現状のなかで、若手教員の育成が喫緊の課題とされている。そのなか、これまでの「先輩の背中を見て学ぶ」といったスタイルから、「先輩教員と一緒に学ぶ」というスタイルで実践のスタイルが移り変わっている現状がある。こうした現状のなかで、子どもたちにとって意味のある実践を実現するためには、教師と学校外が豊かにつながっていくことが求められる。その点を含めて、学校内外をつなぐ取り組みの現状と教師に求められる力について考えてみたことを述べる。このような取り組みを、良質な保健体育の授業につなげ、子どもたちの豊かなスポーツライフを実現していきたい。

テーマ別シンポジウム | 学校保健体育研究部会 | 【課題B】保健体育授業をいかに良質なものにするか

学校保健体育研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／より良質な保健体育授業の具体像を考える その3—子どもたちの「豊かなスポーツライフ」の実現に向けて、教師が身に付けるべき資質・能力とは—

コーディネーター：澤江 幸則（筑波大学）、原 祐一（岡山大学）

2023年8月31日(木) 10:10～12:10 RY203 (良心館2階 R Y 2 0 3 番教室)

子どもたちの豊かなスポーツライフを支えるために求められる良質な保健体育授業とは何かを検討してきた過去2回のシンポジウムを踏まえて、今回は、それを実現へと導く教師が身に付けるべき資質・能力について議論することにした。

具体的には、既存のスポーツや知識を伝えるだけではなく、さまざまな社会情勢に応じて対応できる力、つまり運動やスポーツ、健康な生活を「創る」力や、いろいろな人の力と協調する「つながる」力が求められるという前提のもと、ご自身の教師経験と若手育成の実務経験から中村氏（京都市立下京中学校）、教員養成課程に関わる三田部氏（筑波大学）から、教員をめざす学生の課題を踏まえ、特に運動やスポーツを「創る」力を育成するうえでの取り組みについて、学校体育現場への豊富な助言経験をもつ宮口氏（石川県立大学）から、スポーツ科学という学際的な知見や人材が体育授業とどう「つながる」ことができるかについて話題提供していただくことにした。

これらの話題をもとに、子どもたちの豊かなスポーツライフを支える教師の資質とは何かを、教師教育という観点から議論してみたい。

[学校保健体育-SB-2]スポーツを創る力を育てられる教師

*三田部 勇¹ (1. 筑波大学)

<演者略歴>

1989年より、茨城県公立小学校及び中学校に22年間勤務。2011年より茨城県教育庁保健体育課指導主事として2年間教育行政に携わり、2013年より現職。日本体育科教育学会常任理事、小学校体育（運動領域）指導の手引（スポーツ庁）作成協力者。

予測困難な時代を生きる子どもたちが豊かなスポーツライフを実現するためには、柔軟な考えを持ち、その場や多様な集団に合わせて、スポーツを「創る」力が求められる。演者は現在、教員養成に携わり、保健体育科の指導法において模擬授業を実施している。その過程において、学生の一つの大きな特徴として挙げられるのが、自身の受けてきた授業と部活動での運動経験による、練習を積み重ねて試合に向かうような授業観である。また既成の公式ルールや固定観念にとらわれ、柔軟に運動教材やルールを工夫するといった考え方が出来ない面も見られる。しかし、実際の学校現場においては、運動の技能やスポーツへの興味関心に大きな差が生じている子どもはもちろんのこと、障害のある子どもや外国籍の子ども等が所属する多様な集団に対しての指導に直面することになる。そういった場で、子どもたちの実態に合わせて取り上げる教材や手立てを変えていく、子どもに工夫するポイントを提示して運動の行い方を考えさせるといった、柔軟な対応力が資質能力として必要であると考え、それを身に付けるためには、教科指導の専門性のみならず、自己の視野を広げる多様な経験が必要であり、本シンポジウムではその事例をもとに考えを述べていく。

テーマ別シンポジウム | 学校保健体育研究部会 | 【課題B】保健体育授業をいかに良質なものにするか

学校保健体育研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／より良質な保健体育授業の具体像を考える その3—子どもたちの「豊かなスポーツライフ」の実現に向けて、教師が身に付けるべき資質・能力とは—

コーディネーター：澤江 幸則（筑波大学）、原 祐一（岡山大学）

2023年8月31日(木) 10:10～12:10 RY203 (良心館2階 R Y 2 0 3 番教室)

子どもたちの豊かなスポーツライフを支えるために求められる良質な保健体育授業とは何かを検討してきた過去2回のシンポジウムを踏まえて、今回は、それを実現へと導く教師が身に付けるべき資質・能力について議論することにした。

具体的には、既存のスポーツや知識を伝えるだけではなく、さまざまな社会情勢に応じて対応できる力、つまり運動やスポーツ、健康な生活を「創る」力や、いろいろな人の力と協調する「つながる」力が求められるという前提のもと、ご自身の教師経験と若手育成の実務経験から中村氏（京都市立下京中学校）、教員養成課程に関わる三田部氏（筑波大学）から、教員をめざす学生の課題を踏まえ、特に運動やスポーツを「創る」力を育成するうえでの取り組みについて、学校体育現場への豊富な助言経験をもつ宮口氏（石川県立大学）から、スポーツ科学という学際的な知見や人材が体育授業とどう「つながる」ことができるかについて話題提供していただくことにした。

これらの話題をもとに、子どもたちの豊かなスポーツライフを支える教師の資質とは何かを、教師教育という観点から議論してみたい。

[学校保健体育-SB-3]現代における魅力的な体育授業とは

オルタナティブな授業の提案

*宮口 和義¹ (1. 石川県立大学)

<演者略歴>

日本体育測定評価学会副会長、日本教育医学会常任理事、いしかわっ子体力向上アクションプラン検討委員、いしかわ科学トレ専門グループ委員、小立野ジュニアアスレチッククラブ代表。最近では、子ども達の運動不足を解消するためYouTubeを活用し、豊富な指導経験に基づく独自の体育教材動画（ラダー運動、なわとび運動）を配信している。

ここ数年で教育現場は大きく変わってきた。新型コロナによる子どもたちの体力低下も問題ですが、グローバル化や人工知能・AIなどの技術革新が急速に進み、子どもたちが自ら考え行動する「生きる力」を育むことが求められるようになってきた。しかし、実際の現場では旧態依然とした授業が展開されているケースも少なくないように思われる。子どもたちの知的好奇心をくすぐるワクワクするような体育授業が展開されているであろうか。

最近、オルタナティブ〇〇という用語を耳にするようになった。「型にはまらない」「既存のものに取ってかわる新しいもの」という意味らしいが、これからの体育授業もオルタナティブな要素をどんどん取り入れていくべきではないだろうか。先達の知恵が詰まった新学習指導要領を参考にするのは当然であるが、一歩踏み出し、最新のスポーツサイエンスを取り入れた、より革新的でまさにオルタナティブな授業づくりが必要ではないだろうか。また、部活動の地域移行が進む中、身近にスペシャリストがいるなら、そのつながりをもつことも大いに有効であろう。本シンポジウムでは、地元で取り組んできた事例を挙げながら、今後の体育授業のあり方について提案したいと考えている。